

森鷗外の漢詩における漢字漢語の用法

何 欣 泰

1. 先行研究と漢詩研究の問題点

小島憲之（1988）は、下記のように指摘した。

日本文学のなかにみえる漢語的表現をさぐる諸資料のうち、最も注意すべきは、「漢詩」という韻文、続いて「漢文」という散文である。

従って、森鷗外の漢字漢語の用法を考察する場合、漢詩は注意すべき資料の一つである。

さて、鷗外の漢詩については、次のような先行研究がある。

注釈的研究については次のようなものがある。現在まで、森鷗外の漢詩についての注釈書は二冊がある。陳生保（1993a）（1993b）と古田島洋介（2001a）（2001b）である。

陳（1993a）（1993b）は『鷗外全集』にある222首の漢詩の外に、新たに2首を補足し、収録した総詩数は224首である。三年半の歳月を要し、訓読・解説・語釈・口訳と補説、注釈書としての基本条件を揃えた労作である。

一方、古田島（2001a）（2001b）の収録した総詩数の232首は現時点では最多である。その中では原詩漢字の校訂と語注に参考になるところが多い。古田島（1997）はこれまでの鷗外漢詩についての先行研究をまとめたものである。

語彙研究について次のようなものがある。小島憲之（1984）は「赤野」「望断」「繁華」「火後」などの漢語に焦点を当てて、どれが中国古典に典拠のある漢語であり、どれが和製漢語であるのかを始め、それぞれ詳細に鷗外の用語の謎を解くことに力を注いだ。氏の研究は示唆に富む考察が多く、特に漢語一語一語の荷なう重みを、敏めて実感させてくれる。

漢詩の評論についての研究には次のようなものがある。藤川正敏（1991）は三つの史伝『澀江拙斎』『伊澤蘭軒』『北條霞亭』を素材として、鷗外の漢学的素養と他者の漢詩に対する鷗外の解釈・批評のありさまを論じたが、残念ながら、鷗外が書いた漢詩そのものは氏の直接の考察対象にはならなかった。

押韻と韻字についての研究は両注釈書が中心となって論じられてきた。例えば、古田島（2001a）は押韻の関係から、「朝熊」〈三重県の朝熊山〉の「熊」を同訓の「隈」に換えたところを指摘した。

今まで、鷗外の漢詩研究については、語釈的研究、語彙研究、漢詩の評論、押韻・韻字についての研究が行われてきた。

さて、漢詩においては次節で述べるように平仄¹という観点が重要である。ところが、平仄に関する研究は決して多くない。従って、平仄については、研究の余地があり、平仄の立場から、漢字漢語の用法の特徴を捉え直すことができると思われる。そこで、本稿では平仄を中心として漢字漢語の用法を考察したい。(以下、平は○、仄は●、平韻韻字は◎で示すことにする)

2. 考 察

鷗外が生きた時代の漢詩の韻書・作法書『詩韻含英』² (1879)・『金聲玉振 新撰詩學活法』(1893)や、現在の『漢詩の作り方』(1989)・『漢詩の事典』(1999)などを参考資料として考察をすすめたい。

それでは、鷗外の漢詩の平仄について、具体的に考察することにしよう。以下、[]に囲んだ番号は古田島(2001a)(2001b)に付けられている漢詩番号である。また、書き下しは古田島(2001a)(2001b)によることにする。

[11]は『北遊日乗』(1882)に載せた漢詩である。明治十五年二月十三日条に「鴻台の下に來ぬころはひ 空登りて雨ふらんとす いとつれ／＼なるまゝに舊遊の事おもひ出づ」として掲載されている。

「鴻台」は千葉県市川市国府台を指す。「刀水」というのは古く刀彌河とも記された。ここでは広く利根川水系を指し、国府台の下を流れる江戸川を指す。

- [11] 1 古跡並存刀水濱 ●●●○○●◎ 古跡 並んで存す 刀水の濱
2 悽然瀉淚薦溪蘋 ○○○●●○○◎ 悽然として 涙を瀉ぎ 溪蘋を薦む
3 如今誰復問輕重 ○○○●●○○● 如今 誰か復た輕重を問はん
4 弔罷英雄弔美人 ●●○○●●◎◎ 英雄を弔ひ罷つて 美人を弔ふ

鷗外が作った漢詩が平仄規則に合っているかどうかを、「二四不同」・「二六対」・「反法」・「下三連」という漢詩作法の観点から考察してみよう。

「二四不同」とは「各句の第二字と第四字の平仄を逆にする」作法である。鷗外の漢詩では次のようになっている。

二四不同……●跡～存、然～涙、○今～復、●罷～雄

このように良く守られていると言える。

次に「二六対」とは「各句の第二字と第六字の平仄を同じにする」である。鷗外の漢詩では次のようになっている。

二六対……[●]跡[○]へ[●]水[○]、然[○]へ[●]溪[○]、今[○]へ[●]輕[○]、罷[○]へ[●]美[○]

これも良く守られている。

次に「反法」とは「第一句と第二句」「第三句と第四句」の、二・四・六字目の平仄を逆にする」作法である。鷗外の漢詩では次のようになっている。

反法……（第一句と第二句）[●]跡と[○]然、[○]存と[●]涙、[●]水と[○]溪
（第三句と第四句）[○]今と[●]罷、[○]復と[●]雄、[○]輕と[●]美

これまたいへん良く守られている。

次に「下三連」とは「各句の下三字に、平字または仄字を三つ連ねないようにし、特に平三連を避ける」作法である。鷗外の漢詩では次のようになっている。

下三連……[○]刀水濱、[○]薦溪蘋、[○]間輕重、[○]弔美人

以上から、鷗外は、平仄について厳しくよく守っていると言える。

2. 1. 「利根川」について

さて、鷗外の漢詩には「利根川」を指す語句が二種存在する。

まず、前に挙げた〔11〕の第1句である。ここでは「刀水」と表記されている。

- 〔11〕 1 [●]古跡[○]並[○]存[○]刀[○]水[○]濱 [○]古跡 並んで存す [○]刀水[○]の[○]濱
2 [○]悽然[○]灑[○]淚[○]薦[○]溪[○]蘋 [○]悽然として [○]涙を[○]灑ぎ [○]溪蘋[○]を[○]薦む
3 [○]如今[○]誰[○]復[○]間[○]輕[○]重 [○]如今 [○]誰か[○]復た[○]輕重[○]を[○]問はん
4 [○]弔[○]龍[○]英[○]雄[○]弔[○]美[○]人 [○]英雄を[○]弔ひ[○]罷つて [○]美人[○]を[○]弔ふ

続けて、二月二十三日条に「また蔽ふる前橋を立ちて刀根の浮橋をわたり高崎板鼻を過ぎぬ」として、〔18〕がある。ここでは第1句に「刀川」として表記されている。

- 〔18〕 1 [○]向[○]望[○]刀[○]川[○]指[○]願[○]間 [○]回 望すれば [○]刀川[○]は[○]指願[○]の[○]間
2 [○]水[○]背[○]沙[○]白[○]夕[○]陽[○]殷 [○]水 背くして [○]沙 白く [○]夕陽[○] 殷し
3 [○]擔[○]夫[○]忽[○]叫[○]天[○]將[○]雪 [○]担夫 [○]忽ち[○]叫ぶ [○]「天 將に[○]雪ふらんとす」と
4 [○]漠[○]々[○]寒[○]雲[○]下[○]遼[○]山 [○]漠漠たる[○]寒雲 [○]遼山[○]を[○]下る

両詩は同じ「利根川」をうたうが、なぜ〔11〕では「刀水」、〔18〕では「刀川」の表記を使用したかが問題となる。

「水」は仄字であり、一方、「川」は平字である。仮に、その中の「刀水」を「刀川」にしたならば、避けるべき規則の「下三連」を犯すことになる上、守るべき規則の「二六対」・「反法」を破ることにもなる。

[●]古跡[○]並[○]存[○]刀[○]水[○]濱 * [●]古跡[○]並[○]存[○]刀[○]川[○]濱
[○]悽然[○]灑[○]淚[○]薦[○]溪[○]蘋 [○]悽然[○]灑[○]淚[○]薦[○]溪[○]蘋

即ち、下記のように漢詩の作法から外れることになる。

- ・下三連……「刀[○]水[○]漬」ならば、漢詩の作法に適格であるが、「刀[○]川[○]漬」ならば、漢詩の作法から外れることになる。
- ・二六対……「跡[●]～水」ならば、漢詩の作法に適格であるが、「跡[●]～川」ならば、漢詩の作法から外れることになる。
- ・反 法……「水[●]」と「溪[○]」ならば、漢詩の作法に適格であるが、「川[○]」と「溪[○]」ならば、漢詩の作法から外れることになる。

同様に、〔18〕については、逆に「刀川」を「刀水」にしたならば、「二四不同」・「反法」を犯すことになる。

同望刀 [○] 川 [○] 指 [●] 顧 [○] 間 [○]	* 同望刀 [○] 水 [○] 指 [●] 顧 [○] 間 [○]
水 [○] 背 [○] 沙 [○] 白 [○] 夕 [○] 陽 [○] 殷 [○]	水 [○] 背 [○] 沙 [○] 白 [○] 夕 [○] 陽 [○] 殷 [○]

即ち、下記のように漢詩の作法から外れることになる。

- ・二四不同……「望[●]～川[○]」ならば、漢詩の作法に適格であるが、「望[●]～水[○]」ならば、漢詩の作法から外れることになる。
- ・反 法……「川[○]」と「白[○]」ならば、漢詩の作法に適格であるが、「水[○]」と「白[○]」ならば、漢詩の作法から外れることになる。

鵜外がここで「刀[○]水[○]（仄字）」と「刀[○]川[○]（平字）」を使い分けたのは平仄を配慮したためではないかと思われる。

2. 2. 「バリ」について

次に地名「バリ」の表記について考察してみたい。「バリ」が出てくるのは〔110〕〔127〕の二首である。

『航西日記』（1884）の明治十七年十月九日条に「午前十時至巴厘。投哇兒珀爾客館。邂逅佐藤佐。（後略）」として、〔110〕が記されている。

- 〔110〕 1 別來倏忽閱三秋 別れしより 来^{このきた} 倏忽 三秋を閲し
- 2 期爾依然在德州 期せり 爾^{なんぢ}の依然として德州に在るを
- 3 豈憶巴黎城外月 豈に憶はんや 巴黎 城外の月
- 4 暫時握手話離愁 暫時 手を握つて 離愁を話さんと

〔127〕は『御逸日記』末尾の「附録」にある「詠柏林夫人七絶句」の其六である。

〔127〕其六 私窺兒（Die Gefallene）

- 1 二八早看顔色衰 二八 早く 顔色^{がんしよく}の衰ふるを看る
- 2 堪驚絳舌巧譏嘗 驚く堪ふ 絳舌^{かうぜつ}もて 巧みに譏嘗するは
- 3 柏林自有殊巴厘 柏林 自^{おのづか}ら巴厘に殊なる有り
- 4 唯賣形骸不賣媚 唯だ形骸を売つて 媚^{こび}を売らず

鷗外は「パリ」について、「巴黎」と「巴里」の二種類の表記を使った。「黎」は平字であり、一方、「里」は仄字である。〔110〕の場合、仮に、その中の「巴黎」を「巴里」にしたならば、守るべき規則の「二四不同」・「反法」を破ることになる。

豈憶巴黎城外月 *豈憶巴里城外月
 暫時握手話離愁 暫時握手話離愁

即ち、下記のように漢詩の作法から外れることになる。

・二四不同……「憶～黎」ならば、漢詩の作法に適格であるが、「憶～里」ならば、漢詩の作法から外れることになる。

・反法……「黎」と「手」ならば、漢詩の作法に適格であるが、「里」と「手」ならば、漢詩の作法から外れることになる。

同様に、〔127〕については、「巴里」を「巴黎」にしたならば、「下三連」を犯すことになる。

柏林自有殊巴里 *柏林自有殊巴黎

即ち、下記のように漢詩の作法から外れることになる。

・下三連……「殊巴里」ならば、漢詩の作法に適格であるが、「殊巴黎」ならば、漢詩の作法から外れることになる。

以上から、地名「パリ」には「巴里」と「巴黎」の二種類の表記を平仄に合うように使い分けていると考えられる。

2. 3. 「嘗苦辛」について

鷗外は中国漢詩の詩句を取り込んで、自分の漢詩を作ることがあった。例えば、〔129〕に《古詩十九首・今日良宴會》「饒軻長苦辛」（「嘗」と「長」は同様に平声陽韻に属す）を利用したことが陳（1993a）・古田島（2001a）の指摘にある。

[129] 1 饒軻憐君嘗苦辛 饒軻 君の苦辛を嘗むるを憐れむ
 2 軒昂其志瘦其身 軒昂たり 其の志 瘦せたり 其の身
 3 都門十載求知己 都門 十載 知己を求め
 4 先數新橋第一人 先づ 數ふ 新橋 第一の人

これを平仄の観点から捉えると「二四不同」・「二六対」・「反法」の規則に合致していることがわかる。

ところで、「嘗苦辛」を利用したと思われる詩がもう一つある。

[62] 1 雨氣壓車人語濕 雨氣 車を^{かつ}圧して 人語 湿り
 2 車中有客暗愁催 車中 客有り 暗愁^{あんしゅう} 催す
 3 阿爺昔日嘗辛苦 阿爺 昔日 辛苦を^{せむじ}嘗めたり

4 此地[●]卑[○]身[○]負[●]笈[○]來 此地に 單身^{ひんしん} 笈^{ふく}を負つて來たる

ところが、「嘗苦辛」が「嘗辛苦」に入れ替えられている。これは何故だろうか。

「嘗苦辛」を「嘗辛苦」に入れ換えたのも平仄への配慮のためではなかろうか。《古詩十九首・今日良宴會》の「嘗苦辛」をそのまま引用したならば、「二六対」・「反法」を犯すことになる。

阿[○]爺[○]昔[●]日[○]嘗[○]苦[●]辛[○] * 阿[○]爺[○]昔[●]日[○]嘗[○]苦[○]辛[○]
 此地[○]卑[○]身[○]負[●]笈[○]來 此地[○]卑[○]身[○]負[●]笈[○]來

即ち、下記のようになる。

・二六対……「爺と辛」ならば、漢詩の作法に適格であるが、「爺と苦」ならば、漢詩の作法から外れることになる。

・反法……「辛」と「笈」ならば、漢詩の作法に適格であるが、「苦」と「笈」ならば、漢詩の作法から外れることになる。

2. 4. 「我」と「吾」について

鷗外は漢詩の中で「我」（仄字、延べ語数26）と「吾」（平字、述べ語数22）を一人称代名詞として使用している。例えば、次のとおりである。

〔190〕次白水孤峰韵

- 1 去來何必問因緣 去來 何ぞ必ずしも因縁を問はん
- 2 入地昇天任自然 入地 昇天 自然に任ず
- 3 至竟效顰非我事 至竟 顰みに效ふは 我が事に非ず
- 4 不憑基督不參禪 基督に憑らず 禪に參ぜず

この使い分けには平仄が関係していないだろうか。例えば〔190〕では、「二六対」・「反法」の平仄を合わせるためには、「我」（仄字）でなければならない。

〔81〕雜詩（一）

- 1 舟中不似在家忙 舟中 家に在りて忙しきに似ず
- 2 眠足窓前認曙光 眠り足りて 窓前 曙光を認む
- 3 鳴鐸數聲催我起 鳴鐸 数声 我的起くるを催し
- 4 薦來骨喜一杯香 薦め來たる 骨喜 一杯の香

〔81〕も「二六対」・「反法」の平仄を合わせるために、「我」でなければならない。

次に、「吾」字の用例である。

- 〔93〕
- 1 鳩啼林外雨淋鈴 鳩 林外に啼き 雨 淋鈴
 - 2 爲扣禪扉車暫停 禪扉を扣かんが爲に 車 暫く停む
 - 3 挂錫有僧引吾去 挂 錫 僧有り 吾を引いて去り

4 幾函疊葉認遺經 幾函 疊葉 遺經を認む

「二六対」の平仄を合わせるために、〔93〕は「吾」でなければならない。
つまり、「我」と「吾」の使い分けに関しても平仄が大きな使い分けの基準をなしている可能性が高いと結論づけることができる。

2. 5. 高頻度字「不」について

古田島（2001a）（2001b）の〔一三九〕は詞であり、〔六〕及び〔六五〕～〔七〇〕は鷗外の作か否か、まだ判明していない。従って、鷗外の漢詩は全部で224首である。筆者の調査では、その全字数は9912字である（異なり字数は2349字）。一方、漱石の漢詩208首の全字数は8604字である（異なり字数は1636字）。

鷗外と漱石の漢詩における用字頻度率の上位20位は下記のとおりである。

（森鷗外）

用 字	延べ字数 （森鷗外）	延べ字数 （夏目漱石）
不	109	66
一	94	77
人	78	75
何	76	43
風	67	85
無	66	63
有	60	45
天	60	64
來	54	52
日	52	65
山	52	70
君	52	27
如	40	27
生	40	31
見	40	30
此	39	9
年	37	28
今	37	27
辭	35	7
中	32	47

（夏目漱石）

用 字	延べ字数 （夏目漱石）	延べ字数 （森鷗外）
風	85	67
一	77	94
人	75	78
山	70	52
雲	69	28
不	66	109
日	65	52
天	64	60
無	63	66
花	58	22
空	57	16
來	52	54
春	49	11
秋	49	25
月	48	24
中	47	32
白	46	12
水	46	24
有	46	60
道	44	8

漱石のほうで、「天」「雲」「風」などの字の使用頻度が高いことは既に指摘されている³。一方、鷗外の用字頻度率1位は「不」であり、計109回（1.09%）用いられている。これは2.46首に1回この字を用いていることを意味する。

その中で、「不」が句尾に置かれたのは2回のみである。

〔二三〇〕戊午季秋。在南都。讀歴史圖録。代東寄高橋健目。（五言古詩）

（前略）

53 微軀豈足惜

54 一腋不成裘

55 量力且遲驥

56 君意似我不

〔一六一〕寄懷早川畝南次其送別韻（七言律詩）

（前略）

5 方枝與期三折臂

6 世間誰怒一虛舟

7 峽中烟樹秋搖落

8 此際相思似舊不

この2例はどちらも「似～不」という文型である。句末に用いて疑問を表わす（「いなや」意）場合は「平声・尤韻」である。残る107回の用例は「打ち消し」（仄字）として使用されていた。鷗外は漢詩の中に打ち消しの「不」を多用しているが、「不」（仄字）の多用は詩の韻律を構成しやすくするのではないと思われる。周知のように、漢詩の作法（韻律）を学習するとき、まず頭に入れるのは平字である。それらと仄字の「不」とは組み合わせやすいのではないと思われる。

鷗外、漱石がそれぞれ単独で使った用字を観察すると、鷗外は1142字（48.6%）で、漱石は428字（26.16%）である。鷗外が使用した漢字は漱石より多様（語彙が豊富）であることを意味するだろう。

3. まとめ

以上、述べてきた点をまとめると次のようになる。

これまで平仄についてはあまり研究されてこなかったが、鷗外は平仄に多くの注意を払っていることが明らかになった。

「利根川」・「バリ」・「昔苦辛」・「我」と「吾」の考察から、鷗外は平仄に合わせて漢詩の語句を選択している姿勢が窺える。

鷗外は漢詩の中に打ち消しの「不」を多用している。

これから日本の漢詩人の作詩法の一面を明らかにすることができるのではないか。

なお、本土の中国において、王（1977）は「格律是爲我們服務的；我們不能讓思想內容去遷就格律」（p.131）（格律に束縛されないように）と述べ、下記の杜甫の例を掲載している⁴。

杜甫・七律《白帝》

1 白帝城中雲出門

2 白帝城下雨翻盆

（略）

平仄の法則によれば、2句目の「白帝」は「仄仄」を用いなければならないが、杜甫はそれを破っていた。

このような作詩法を日本漢詩の歴史にどのように位置づけるか、今後の課題として残されていると思われる。

【注】

- 1 平仄……漢字をその声調の差によって、「平声」・「上声」・「去声」・「入声」の四種に分ける。「平声」は文字が多いので、単独で「平」とし、「上声」・「去声」・「入声」の三種はまとめて「仄」として一括する。鷗外の場合、南宋期の『平水韻』（107韻。後に106韻に改訂）によって、平仄を分けている。
- 2 『東京大學総合図書館漢籍目録』に次の鷗外蔵書が見られる。
 - ・『詩韻含英十八卷增詩韻異同辨』 清劉文蔚 異同辨清任以治蔡應襄同輯 天保十年大坂堺屋新兵衛等據文化十三年烏山侯刊十四年大坂河内屋茂兵衛等印本重刊
 - ・『聲補訂正詩韻含英十八卷增詩韻異同辨』 清劉文蔚 異同辨清任以治蔡應襄同輯 日本木村良輔聲補訂正 明治十五年京都竹苞樓佐々木惣四郎刊本 文永堂藏板
 - ・『聲補註解詩韻含英十八卷增詩韻異同辨』 清劉文蔚 異同辨清任以治蔡應襄同輯 日本谷喬聲補 明治二十八年大阪田中太右衛門大塚宇三郎同銅版印本
- 3 高木（1987）『漱石漢詩研究資料集 用字用語索引・訓讀校合』 P.36
- 4 周知のように、杜甫は最も詩の韻律を厳守している一人である。

【参考文献】

- ・小島 憲之（1984）『ことばの重み——鷗外の謎を解く漢語』新潮社
- （1988）『日本文学における漢語表現』岩波書店
- （1998）『漢語逍遙』岩波書店
- ・古田島洋介（1997）『研究の回顧と展望——〈鷗外漢詩〉研究の現在』『講座 森鷗外 3 鷗外の知的空間』所収・新曜社

- (2001a)『鷗外歴史文学集第十二巻 漢詩（上）』岩波書店
 (2001b)『鷗外歴史文学集第十三巻 漢詩（下）』岩波書店
- ・ 陳 生保 (1993a)『森鷗外の漢詩 上』明治書院
 (1993b)『森鷗外の漢詩 下』明治書院
 (1998)「研究ノート 森鷗外と中国文化——その漢詩から見て」『日本研究』（第17集）
 所収
 - ・ 藤川 正数 (1991)『森鷗外と漢詩』有精堂
 - ・ 松浦友久編 植木久行・宇野直人著 (1999)『漢詩の事典』大修館書店
 - ・ 羅竹風主編 (1990)『漢語大詞典』〈中国〉漢語大詞典出版社
 - ・ 何 欣泰 (2000)「森鷗外の漢文口記に見られる外国人名の表記についての一考察——『陸務日記』
 を中心に——」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第10号
 - ・ 東京大学総合図書館編 (1995)『東京大学総合図書館漢籍目録』東京堂

【テキスト】

- 石川梅次郎・浜久雄編『詩韻含英異同辨』（修正7版）松雲堂、1982年（谷喬編『詩韻含英』（1879年）の修正版）
 釈清潭 林竹次郎『作詩關門』（影印再版）明治書院、1980年（初版1924年）
 新田大作『漢詩の作り方』（改訂13版）明治書院、1989年（初版1970年）
 福井淳編『金聲玉振 新撰詩學活法』（第十版）田中宗葉堂、1922年（初版1893年）
- ・ 『鷗外全集』第三回岩波版、1971年～1975年
 〈付記〉

本稿は2001年10月19日に福井大学で開催された第188回近代語研究会発表大会での発表題目を基にしたものである。発表の席上、また、会終了後、御批判、御教示を賜った先生方に御礼を申し上げます。

（カ キンタイ ノートルダム清心女子大学非常勤講師）